

## 団塊の世代と道南会

道南会会長 田 沼 修 二

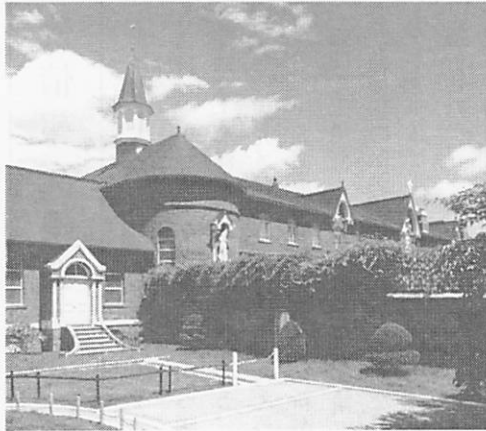
今年、創立四十五周年を迎える道南会にとって、一つの大きな転換期を迎えることになる。それは、やがて始まる「人口減少社会」が現実のものとして、あらゆる組織に影響を及ぼすに違いないからである。そしてこの問題と表裏一体に高齢化社会の問題があり、団塊の世代の定年の増加が挙げられる。

「人口減少」「高齢化」「団塊の世代の定年」は、今後徐々に社会のすべての分野に大きな影響を与えずにはおかない。すでに労働力の減少、高齢化により負担力の減少から経済の活力の低下を予想するエコノミストも多い。

しかし、一方では社会の成熟が進み、豊かな経済生活や文化生活を享受できる基盤が実現すると、バラ色の近未来を予測する人々も少なくない。

### 帰属意識の低下

近ごろニートと呼ばれる学校生活や職



業に背を向ける若者が多くなってきたが、これは生活の基礎としての学業や生活の資を得る職業を軽視しても生きていける家庭や社会に対する甘えに他ならず、自分の社会や家庭に対する帰属意識が極端に低下した結果であろう。

このような傾向を最も強く反映してい

るのが「同窓会」や「ふるさと会」の活動である。専ら親睦や懐古望郷を基本とする非営利的で、従って強制力を持たない「同窓会」や「ふるさと会」は当然会員の減少や活動力の低下を来しているのが実情である。「同じ学校で学んだ」「同じ土地で生まれ育った」などということに関心も愛着もない若者の増加によって、多くの会の悩みは深い。

### 道南会の場合

四十五年の歴史を持つ道南会の場合を考えてみると、創立当初に三十代や四十代の会員はすでに多くは逝去されたり、健康に問題を抱えて会の活動から遠ざかっているのはやむを得ないことである。

しかし、この数年の傾向としては、亡くなったり退会される会員数と、新しく入会された会員数がほぼ匹敵している、このことの理由の一つとして、定年を迎えた団塊の世代の入会が増えつつあることを挙げることができる。

六十歳が平均的な定年年齢として計算すると、今後十年間に定年を迎える団塊の世代といわれる人々は、およそ七百万人と推定されている。非就業の家庭の主婦を加えればその数は一千万人を超えることになる。しかもこれらの人々はニートと呼ばれる若者達と違って帰属意識は決して低くない。

学業を終えてから例えば首都圏に就職し、高度成長の担い手として働きつつ家

庭を持ち、就業先でそれぞれ一定の地位を得て定年を迎えた世代である。今までは働くことと、家庭を守ることだけに集中していた生活から解放され、自由な時間を自分だけのものとして使える時期に入ったのである。

### 団塊世代への期待

定年後の生活は人様々で、一概に律することはできないが、その中から一人でも多く道南会に迎え入れたいものである。

それは会員数を増やすことが目的ではなく、新しく迎える会員がこれからの道南会の活動に新風を吹き込んでくれることを期待したいからに他ならない。すべての組織は旧習にならずみ、新しいことに挑戦する意欲を失って衰退する。道南会の四十五年の歴史を新たな視点から見直し、さらなる発展のために、定年を迎える団塊の世代の同郷人の多数の入会を期待したい。

### 道南会創立四十五周年記念総会

(平成十八年一月二十一日・土)

今年、道南会創立四十五周年に当たるので平成十八年度の新年総会を四十五周年記念総会として行います。

総会当日は、できるだけ多くの会員の参加を期待しております。なお、総会時に記念行事や記念誌の発行、郷土訪問旅行などについての概要を発表する予定です。

# はこだて観光大使情報交換会

十月六日(木)午後六時から、東海大  
学校友会館で、観光大使五四名、函館市  
から井上博司函館市長、沼崎弥太郎函館  
国際観光コンベンション協会会長が参加  
し、観光大使情報交換会が開催された。

平成七年に設けられたはこだて観光大  
使は現在二六八名。首都圏には一一七名  
がおり、それぞれのフィールドで「国際  
観光都市・函館」を広く国内外に紹介す  
べく、日々活動をされている。

情報交換会は桜井市商工観光部長の司  
会が始まり、続いて井上市長の挨拶と函館  
市の近況について次のような報告があった。  
・平成十六年十二月一日の市町村合併に  
より中核市の要件を満たし、平成十七

年十月一日に中核市へ移行したこと。

・合併で、市が従来から推進している国  
際水産・海洋都市構想が加速化する。

また、観光メニューの多様化が考えら  
れる。・北海道新幹線の新青森・新函  
館間の工事着工、・JR函館駅の新築、

駅前周辺の区画整理完了、・函館空港  
ターミナルビルの新築オープンなどが  
報告された。

続いて函館国際観光コンベンション協  
会 沼崎会長の祝杯の発声の後、和やか  
な雰囲気の中に懇談へと移った。

函館市からは郷土の味、イカめしや昆  
布巻、ジャガイモなどの提供もあり、会  
場の随所で大使同士、市長や観光協会会  
長、事務局と大使の間での情報交換が活  
発に行われた。

観光大使が一同に会するのは七年振り  
で、歓談もなかなか尽きず、閉会時間を  
延長し、田沼修二北海道道南会会長の乾  
杯で締めくくり、散会となった。

○ 函館市の近況

○ 大門の新生所「大門横丁」誕生

かつて青函連絡船や北洋漁業とともに  
栄えた駅前・大門地区の商店・飲食店街。  
その再生への大きな期待を背に「大門横  
丁」が十月二十三日オープンした。

「大門」の由来は、函館随一の色町と

して繁栄を極めた「大森遊郭」の入り口  
に巨大な門がそびえていたことによる。  
門は、昭和九年の大火で焼け落ち、その  
後、再建されることはなかったが、「大

門」は、若松町・松風町一帯、駅前から  
松風町方面に続く函館の中心街区の名称  
として現在まで親しまれ使われ続けてい

る。昭和三十年代まで続いた大門地区の  
繁栄は、北洋漁業の衰退や郊外への大規  
模店舗の進出に押されて商店・飲食店の

転業・廃業が相次ぎ、次第に空き地・空  
き店舗が目立つようになったが、最近の

JR駅の新装オープン、駅前広場の整備、  
朝市井横丁、クイーンズボートのオープ  
ンなど、新しい動きが出ている。

「大門横丁」への出店はラーメンや寿  
司、ジンギスカン、焼き鳥、居酒屋、郷  
土料理などバラエティーに富んだ二十六  
店舗で、函館の新生所として地元客や観  
光客で賑わっている。場所は、電車通りを  
挟み、ポーニモリヤの斜め向かい。来函の  
際には、是非、立ち寄っていただきたい。

○ 中央図書館のオープン

五稜郭の「渡島支庁跡地」で建設が進  
められていた中央図書館が十一月二十七  
日オープンした。

施設は、敷地約二万七千平方メートル、  
地下一階、地上二階建て、総床面積約七  
千五百平方メートル、駐車台数百五十台、  
駐輪台数百五十二台、収蔵冊数六十三万  
冊、郷土資料七万点、閲覧席数約五百

席で、国内でも有数かつ誇るべき図書館  
として地域文化の振興発展に大きく寄与  
するものと期待されている。

○ 函館市ビジネス交流会の開催

函館市ビジネス交流会は、函館市、公  
立はこだて未来大学、財団法人函館地域  
産業振興財団、函館国際水産・海洋都市  
構想推進協議会の四団体の共催で、函館  
国際水産・海洋都市構想や公立はこだて  
未来大学の産学連携、都市エリア産学官  
連携促進事業の取組状況や函館地域のI  
T・水産海洋関連の企業を首都圏の企業  
に紹介し、ビジネス交流を図ることを目的  
に、平成十七年十月二五日(火)午後二時か  
ら、赤坂プリンスホテルで開催された。

会には一〇三名が出席し、函館市木村  
助役の開催挨拶の後、北海道大学大学院  
水産科学研究院嵯峨直恒教授と公立はこ  
だて未来大学長野章教授による地域紹介  
のほか、地元企業六社の独自性の高い事  
業のプレゼンテーションや展示発表が行  
われ、熱心に発表を聴き、関心を持って  
展示品を見回る首都圏企業参加者の姿が見  
られた。また、交流レセプションでは、地  
元企業と首都圏企業との活発な交流が図ら  
れるなど、盛会裡に終了することができた。

出席者からは、「市レベルでこうした  
取り組みを行う都市はまれで、函館市の  
将来が楽しみ」「来年も是非参加したい」  
等、高く評価していただき、函館をアピ  
ールする絶好の機会となった。



# 江戸松前風聞史（新撰組余話）

大正時代まで生存していた二番隊長・

永倉新八は松前藩士である

## 弦巻鋼男

テレビ、映画、小説、雑誌に数多く幕

末新撰組の顛末記が描かれ、箱館戦争の土方歳三も激動的な生き方として三年前に五稜郭公園前にモダンな等身大の銅像が建立され、観光客を楽ませ、また新春のテレビで「土方歳三最後の一日」の放映が予定され、話題を呼んでいる。

さて、

新撰組二番隊長・永倉新八は、あの幕末動乱に京都で泣く子も黙るといわれた。その一方で、永倉先生と親しまれてもいた。実は新八は、浅草三味線堀の松前藩江戸下屋敷、永倉勘次・母敏恵（長倉家）の一人っ子として生まれた。新撰組の隊員の多くは地方出身者が多かったがその中であって、江戸育ち、自由奔放のダンディな青年で、学問もあり、剣術は神道無念流の免許皆伝、遊び友達に誘われて武者修行として脱藩し、新撰組に参加した（本姓は松前脱藩に配慮）。

腕前は、隊で三本の指に入ると恐れられ、派閥の調整役としても買われていた。

京都におけるあの壮烈な薩長との池田屋騒動の活躍で新八の名は京都でももちろん、江戸でも語り草になったといわれ

ていた。

## 新八の池田屋騒動の太刀

過激派の浪士を次々と斬り、「人斬り新八」ともいわれ、池田屋では「鯉の寝床」の細長い屋敷にもかかわらず、二尺七寸（八一cm）の太刀を振り回し、太刀が勢い余って庭先の石に強く当たり鏝元が九寸のところで折れてしまったという。

その太刀は、昭和二十年まで松前町杉村兵輔宅に永く保存され、昭和九年松前懐古展覧会に出品されたこともあり、「ノコギリのようなポロポロ」の傷あとが十二、三カ所もあったという。

残念なことに昭和二十年の終戦時のアメリカ軍の刀剣没収の折、杉村家では恐ろしくなり海へ捨ててしまった。ここで惜しくも松前町と永倉新八をつなぐ唯一のものが失われてしまった。

## 永倉新八の名を杉村義衛に改める

新八は、京都、大坂の戦いで、幕府軍の撤退により、江戸で近藤勇、土方歳三等と意見の相違により別行動をとり、同志の十番隊長・原田等と共に奮戦していたが、当時松前藩家老下国東七郎の特別の配慮で、明治二年蝦夷地松前に初めて渡る。家老下国氏の世話で藩お抱えの医

師杉村松伯の娘米子と養子縁組し、ここを名を杉村義衛と改める。

しかし、新八は、常に胸中に新撰組の「誠」の魂を秘めていた。明治三年、新政府は、旧幕府藩主の罪を許すと布告したが、旧新撰組には厳しかったという……

この布告に対し、新八は冷笑……。「俺たちは錦の御旗に刃向かった賊だから罪を許すとは……。それでは、あの過激派の薩長の奴らは天子様の御所へ大砲を撃つたあの時はどうなんだ……。勝てば官軍、負ければ何とかなか？」と新政府を批判した。時代は近代国家へ一歩一歩歩き始めている中、明治維新なんて薩長が偉いのではなく、日本国民が偉いのだと強く主張していたという。

新八は、時代の移りと共に東京に剣術道場を開いたり、北海道に帰り、樺太刑務所の受刑者に剣術を教えたりした。講義の際にも常に不動の姿勢

で話し、聞くものは震えあがったという。また、北大でも師範代を務め、大正四年、七十七歳で永眠。長寿を全うした。

永倉新八の新撰組の誇りは彼自身の胸の中にあり、いささかも悔いのないものであつただろうと思う。この文を書いている私も永倉新八の大ファンとして「誠」の心意気は現代でも通ずると信じている。小樽では、新八を改めた杉村義衛の墓があり、東京ではJR板橋駅二分のところに生前新八等が奔走して建立した近藤勇、土方歳三の石碑がある。同じ場所に蜂須賀正誼侯爵によつて建立された「憂国の志 松前藩士永倉新八」の石碑があり、現在も毎日のようにファンの手紙や供花が新八を偲び飾られている。

— JR板橋駅前東口二分 —



— 晩年の永倉新八 —

# 帆刈幸子さんの青函連絡船

## 能味寿哉

名誉会長の和田貞一さんから、改めてその才筆を賞賛された帆刈さんの遺稿「青函連絡船の思い出」は、平成八年十二月に発行された「道南会創立三十五周年記念誌」に載った一文である。あの頃、帆刈さんは、長い患いから床につくことので多い体だったが、たまたまその年の三月二十日（春分の日）の朝、NHKで全国放映された「津軽海峡はるかに遠く」を見て、ペンをとらずにおられない感情の高まりだったようである。

「あのタイトルが胸を熱くさせる素晴らしいドキュメンタリーをみました。私にとつて「連絡船」と「津軽海峡」とは、ふるさとそのものなのです」という、何とも共感を誘う書き出しだった。

そして、筆者まで、よかつたら記念誌に載せてくれると嬉しいと原稿が送り届けられた。

道南会草創の頃から幹事長の阿部良平さんや皆さんに可愛がられて本当によく気がつきよく働く彼女のことだったし、会報にもしばしば古里への思いを込めた寄稿も忘れなかつたから、和田さんも日頃目をかけておられ、度々新橋の「笹ぶえ」に来るようにお声をかけて下さっていた。

私は、預かつた原稿の少し乱れた箇所を補正して和田名誉会長にお見せしたと

ころ、「帆刈さんがいいのを書いてくれたね。あの人の文章は肩肘張らず素直でいい。読んだ人を引きつける魅力が不思議なくらいだね」と賞賛して下さい。

そして、「笹ぶえで一献差し上げて慰労したい」と、私につなぎを付けられるよう仰られた。既に療養も長くなり、外出も



ままならない彼女も残念だったと思うが、弟御の古井勝春君も家業の忙しさから出られないと分かつて、結局和田さんを中心に私と三上佑君（和田さんの函中後輩）がお相伴する羽目となり女将の神れい子さんも一緒に、帆刈さんの全快本復の速

やかなことを祈ったことだった。

彼女は、平成八年五月八日、病あらたまつて他界されたから、本当に道南会を愛し抜いて、遺された玉稿と思うと、いまだに深い哀悼の情にかられる。七二歳の若さだった。

今、函館港に係留され、記念船「シーポートプラザ」の役目を担っている「摩周丸」には、道南会の第一回ふるさと訪問旅行で、青森港を出港した思い出が重なる。昭和六十年十月、和田会長以下二十七人の有志会員が、晴れやかな顔を揃え、船内食堂を借り切って、サツポロピールの生ジョッキを何杯と飲み干したあの日（実は和田会長のポケットマネーだったのです）、健康で函館山、横津連峰を仰ぎ見られた爽快な喜びはたとえようがなかつた。

私はこの後、三上佑君と江差への旅の続行を試みたが、幸い東栄管財の武内平八郎ご夫妻も参加してくださいまして五厘澤温泉の慶喜旅館に一泊したり、重要文化財指定の中村家の建物を探訪したり、駅までの長い道のりに一休みした喫茶店、ポナールのうまいココアを味わったりで、貴重な体験をさせてもらつた。

いまからちょうど二十年前の話になるが、三上君から当時の写真を借用でき、紙面を掲載することができたのは誠に感謝にたえない。

## ふるさと大使

### 全国大会二〇〇五

ふるさと大使制度は、現在全国各地で百四十余りが制度化され、約一万人の大使が委嘱されているが、その全国大会二〇〇五が一〇月二〇日、アルカディア市ケ谷で百七十名が参加して行われた。

北九州市の末吉興一市長の「世界に羽ばたくふるさとまちづくり」という講演後、情報交流会が始まつた。

会場には全国の大使から提供された特産品や地酒がずらりと並び、参加者はそれぞれの品を味わっていた。はこだて観光大使は函館ワインとトラピストバターを提供し参加者から好評を博した。



# 『会員プロフィール』

平成十五年の新年号の会報に初めて「会員プロフィール」を掲載しました。この時には、十二名の会員からご自分の生い立ちや経歴、お仕事、趣味、ご家族のことなどをご紹介いただき、会員相互の理解と親善に大変役立ちました。以後、平成十七年夏季号までに通算で一九一名の会員から原稿を寄せていただきました。今号では、十名のみのご紹介と大変少なく、残念ですが、今後とも引き続き多くの会員に登場していただきたいと考えておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします（原稿は二百字程度。内容自由）。

**鎌田幸光** 昭和十六年、松前郡福島町吉岡生まれ。吉岡小、中学を卒業。小学校三年から六年まで、道南会顧問をしておられる福津様に教わりました。恩師です。

**昭和三四年**、東京に出て呉服店に就職。現在は大京管理勤務のかたわら、自宅で呉服商を営んでおります。趣味は、三味線を弾き民謡を唄うことです。月に二、三回は民謡でボランティア活動もしております。また、年に二度位は民謡の大会にも出場し、楽しんでおります。

**近匠隆章** 昭和十四年の元旦に松川町に生まれる。六人兄弟全員が巴小に入学。私は松川中、東高校と野球一筋で、勉強より野球、野球の毎日でした。高校卒業後、三井美唄鉱業所に入社。ノンプロ野球で三年程プレーしました。しかし、会社が閉山したため函館の関連会社へと転

元町)に生まれる。家の窓から港が見え、連絡船や漁船が行き来していました。今では、そうした風光明媚な景色が懐かしく感じられます。昭和二十三年青柳小卒業。谷地頭中学から、昭和三十年函館工高建築科卒業。高校在学中はサッカー部員として国体にも二回参加。上京してゼネコンに就職。昭和五七年に建設会社を設立し、二十年間自営。平成十二年リタイアし、現在に至る。

趣味は、旅行、絵画（水彩画）、仏画、絵手紙に励む毎日です。子ども二人は独立。現在は妻と二人暮らしで、最近古希を迎えたばかり。ますます健康に留意して、充実した生活を送って生きたいと思えます。

**相馬泰二** 一九二〇（大正九）年三月五日、現在の相馬株式会社社屋にて出生。

その後、谷地頭の相馬の池の所に移り、谷地頭小から函館中学（現・函館中部高校）へ。昭和九年の大火で焼け出され、富岡町の函病の向かい、木内病院の隣に住む。前大戦には兄弟三人が出征するも一人も欠けることなく、終戦を迎えた。

特に私は零戦の搭乗員として鹿屋航空隊に配属され特攻隊員として終戦を迎えた。六男三女の九人兄弟姉妹が一人も欠けることなく終戦を迎えることができた。

現在も兄弟姉妹九人それぞれ元気で年を重ねております。これもひとえに両親のお陰と感謝している次第です。

**高橋順吉** 昭和二年、舟見町生まれ。私の原点は、第一消防署脇の「幸坂」に登ると正面に「山上大神宮」があり、その左に我が「常盤小学校」、その右下には「旧ロシア領事館」、常盤小学校から「巴の港」に「西浜の岸壁」「函館ドック」、石垣の下の「我が家」です。

もう一つの宝物は、「家族」。祖父から父を経て、叔父・我が兄弟の名前が、友吉・千代吉・健吉・幸吉・真吉・勇吉・誠吉・順吉・章吉と見事に「吉」繋がり。「男系」家族です。お酒のつまみにもなります。この「宝物」の道南・函館で生まれ育った自分と四国から嫁に貰った今の家族も大切に、道南会での活動を楽しみにしています。

**高橋 大** 大正十四年生まれ。桔梗小・弥生小卒業後、札幌の北海中学に入学。

その後、函館市中（現・東高）に転校し、同高一期生として卒業。二年高水入校。二十四年の卒業後、(株)水産新聞社勤務。三十年函館の(株)北海水産新聞社・取締役東京支局長。三三年(株)日本海苔食品新聞社を創立。同社社長兼主筆。三五年(株)河童社を設立し、月間「水産振興」誌発行。同誌編集長。六二年(株)丸正フーズ顧問。古希を迎えて同社を退社後、自宅でMETS英語教室を開設し、「時事英語勉強会」と「言語で読むシェークスピアの会」

佐々木 直 昭和十年、會所町（現・

を主宰している。

趣味はゴルフ。

二上達也 昭和七年一月二日函館市生まれ。昭和五年函館中学校（現・函館中部高校）卒業。同年故渡辺東一名譽九段門に入門。同年四段。昭和四八年九段。タイトル戦登場二六回。王将一期、棋聖四期。A級在位通算二七期。平成二年引退。平成元年より十五年まで日本将棋連盟会長。現在同盟顧問。平成四年紫綬褒章、同十三年函館市栄誉賞、同十四年勳四等旭日小綬章受章。

現在は、将棋道場（新宿将棋センター）、将棋教室（王将会）にて指導対局を行うほか、原稿執筆、詰将棋、次の一手などの研究を行っている。昭和二五年の春に上京して以来将棋一筋で現在に至る。最近は、何をやるのも億劫になって困っています。

三浦一志 昭和十四年生まれ。亜細亜大学を経て中華民国国立政治大学に留学。昭和五十年へイム・インターナショナルを創立。昭和五九年エイ・エル・エイを創立。昭和六三年デイ・シー・エスを創立。平成二年日中文化交流発展基金を設立。平成四年シー・エム・シーを創立。平成八年安田火災海上保険顧問に就任。平成十五年中国太平洋経済合作全国委員会工商委員会海外代表に就任。平成十七年駐日コンゴ民主共和国大使顧問に就任。

三浦輝夫 昭和二二年、上磯町字三石生まれ。石別小、中、函館高専卒。早いもので、田舎にいたときよりも倍くらいの都会の生活となっています。あまり帰省することはなくなりましたが、潮騒の音、海に浮かぶ漁火が懐かしく思い出されます。今までは、土木技術者として昼夜を問わず頑張つてきましたが、第二の人生として、現在の仕事を楽しくしようと心掛けています。また、毎朝のジョギングで体調の維持に努めています。前回の道南会に出席し、心温まる思いでした。

宮下 正 昭和十二年、東京都北区に生まれる。戦争が激しくなるにつれ、両親の故郷・新潟に疎開。その後、父親が戦死したため、伯母の住む函館市旅籠町に居候。幸小、舟見中に学び、函館工業高校（化学科）に入学。高校の入学と同時に陸上競技一〇mハードルを始める。高校三年時、全国大会（インターハイ）で三位入賞。高校東西対抗戦に選抜され、二位になる。神奈川県五位入賞。その後上京し、大学に進学。大学卒業後、実業団リッカーに入社。数々の試合に出場。東京オリンピック五位入賞の依田選手と合宿練習を共にする。この間、監督に口ス・オリンピックで活躍された吉岡隆徳さんに師事。現在、協和化学㈱代表取締役。

### 「東京上磯会」 定時総会

「東京上磯会」の第十一回定時総会と懇親会が、十月二日（土）、東京千代田区のレストランで、海老澤上磯町長、田沼道南会長などの来賓のほか、多くの会員が出席して行われた。

上磯会は、発当初より、普段着のままの気楽な集いとして、会員の日常のストレス解消の一助として、強いては最近失われつつある「やさしさと思いやり」の心が蘇る場としての思いを込めて続けられており、この日も終始和やかで楽しい雰囲気の中でパーティが行われた。会には、芸達者な会員が多く、余興として、尺八演奏やハーモニカの独奏、詩吟、詩舞などが披露され、大いに会を盛り上げていた。会の最後には、全員で「新・上磯音頭」を合唱、再会を誓い合つて閉会した。

なお、上磯町は、平成十八年二月に大野町と合併し「北斗市」となる。これにより慣れ親しんだ「上磯」という名が消え去る一抹の寂しさはあるが、合併後は北斗市として大いに発展して欲しいと願っている。

合併後の「東京上磯会」の名称については、機関決定をしてはいないが、個人的には残しても良いのではないかと考えている。

### 同窓会 活動状況

◆白楊ヶ丘同窓会（函館中学校・函館中部高校）東京支部  
九月十一日（日）  
フロラシオン青山 二二五名

◆函館西高等学校つじヶ丘同窓会東京支部  
十月八日（土）東海大校友会館 二六〇名

◆東京幸会（幸小学校同窓会）  
十月十五日（土）ベルシー又竹芝 三十八名

◆函館大谷学園同窓会  
十月三十日（日）新高輪プリンスホテル「桃季」 四十名

◆東京弥生会（弥生小学校同窓会）  
十一月五日（土）三越本店 二十三名

◆東京青柳会（青柳小学校同窓会）  
十一月十日（木）ダイヤモンドホール 四十六名

◆函館工業高校関東支部同窓会  
十一月二十七日（日）芝弥生会館 二〇名

◆函館遺愛同窓会  
十二月二日（金）午前十一時 アイビーホール青学会館 二二二名

# 平成十七年度夏季懇親会

九月十日(土)、午後一時から、東京・御茶ノ水ホテル「聚楽」で、今年の夏季懇親会が開催された。

懇親会には、今年から会員になったエアドウ(株)の猪瀬東京支店長を始め、九六人の参加者で賑わった。

福田裕子さんの開会の言葉で会は始まり、最初に田沼会長が「ふるさと函館は、昨年の下海岸の三町一村との合併や、北海道新幹線の着工が決まり、今後ますますの発展が期待されており、誠に喜ばしい。道南会も来年目出度く創立四十五周



年を迎える。この記念事業の一つとしてふるさと訪問旅行を企画しているが、皆様多数のご参加をお願いしたい。また本日は百名近くの参加者があるが、最近亡くなられる方も散見されるので、これからの会の発展のためにも若い会員の加入を呼びかけていたきたい」と挨拶した。

次に、公務のため出席できなかった井上博司市長のメッセージ「昨年の合併による新函館市の誕生に続き、森町、砂原町の合併、その後、八雲町と熊石町、上磯町と大野町の合併が予定され、道南の市町村は大きく様変わりしつつあります。また、去る五月には、全市民待望の北海道新幹線の新函館～新青森間の函館側からの建設が着工され、これに伴い道南のより一層の発展が期待されている。今後とも道南会の皆様の変わらぬご支援をお願いしたい」を、阿部函館市東京事務所長が披露した。

続いて、中村顧問のご発声で乾杯、懇親会に移った。会の中では新入会員七人が板垣副会長から紹介された。

懇親会では、ふるさとの話が弾む和やかな雰囲気の中で、金谷博治さんが民謡を披露。会場内では金谷さんの美声に酔いしれて、会は大いに盛り上がっていた。会の最後に、沼崎副会長の一本締めで



締めくくり、会員一同名残を惜しみながら散会した。なお、懇親会には、函館市から昆布巻が、サッポロビールからはビールが寄贈され、参加者はふるさとの味とビールに舌鼓を打った。

川守田孝平 記

## 平成十七年度 夏季懇親会出席者

【来賓】

※サッポロビール(株)

営業推進部専門部長

手島孝雄

【参加者】

安達昌子、厚谷諭、阿部喜久雄、阿部

正身、荒木道雄、池上謹之助、泉龍夫、板垣寿見子、大水和彦、加藤信利、金谷博治、上村義則、川口嵩子、河村栄子、川守田孝平、川守田礼子、甘露寺愛、帰山武志、小坂鉄雄、小助川昭一、小林寅雄、小林嘉則、小森良彦、斉藤勝美、坂本保子、佐藤純夫、佐藤成子、佐藤元昭、澤株正始、澤株尚子、島田瑞子、新谷義克、菅愛子、菅原大作、杉田博子、須藤珠美、瀬田松吉昭、相馬滋、染木志郎、染木トシ、高木晃一、竹中裕行、田代沙智子、田沼修二、田村治雄、田村良人、田村房江、田村仁、丹野康男、千葉純子、土橋道子、敦澤義彦、弦巻鋼男、鶴本支郎、土井真一、時田厚子、豊田利雄、豊田みさ子、島本玲子、長島康、中村隆俊、納代鉄也、波間省三、新山春一、沼崎貞良、沼崎茂子、根来美和子、原口久江、原田美恵子、原ヒエ子、比嘉裕子、東川正秀、東川満子、福津達男、二上達也、古井勝春、堀内洋子、堀江良子、本間作喜、松浦和彌、松代晃明、三国栄顕、三国比左男、三村寿雄、望月啓子、山木和子、山田克明、山名昭二、山本陽子、若林英毅、渡邊宏司。

## 新入会員紹介

(一)内は出身小学校

鎌田 幸光(吉) 岡 福津達男さんの紹介  
 小助川昭一(青) 柳 板垣寿見子さんの紹介  
 高橋 順吉(常) 盤 三村寿雄さんの紹介  
 竹岡 亮三(付) 厩 島田瑞子さんの紹介  
 富岡 栄子(港) 板垣寿見子さんの紹介  
 堀江 良子(常) 盤 三村寿雄さんの紹介  
 山本 陽子(千代ヶ岱)佐藤成子さんの妹

## 道南会行事報告

### ☆サツポロビール千葉工場見学

七月三十日(土)午後一時、津田沼駅に集合し、バスで工場へ。土曜日ということので工場のラインは止まっていたが、ベテランのガイドさんの案内で工場を一巡。見学後には、見学者用の食堂で、連日の猛暑の中で乾ききった喉をできたての生ビールで潤した。例年行っているこの行事は大人気で、当日の飛び入り参加もあって、約六十名が参加。乾杯、乾杯で大賑わいであった。

### ☆道南会夏季懇親会

九月十日(土)午後一時より、東京・千代田区のホテル「聚楽」で開催(詳細別掲)。

### ☆横須賀・猿島散策

十月二十七日(木)

雨天のため、残念ながら中止。

### ☆平林寺と野火止用水散策

十一月十八日(金)午前十一時、

東武東上線の朝霞台駅に集合し、戸田医科グループ(会長・中村隆俊道南会顧問)提供のマイクロバスで埼玉県新座市野火止の平林寺へ。平林



寺は、一三七五年に開山された臨済宗妙心寺派の別格本山で、禅修行のための専門道場。当初は岩槻市にあったが、一六五五年に川越城主となつた松平伊豆守信綱が、自領での先

祖供養のために現在地に移築された。境内には、大変樹木が多く、武蔵野の面影を最も良く残しているため「武蔵野疎林」として天然記念物に指定されている。

平林寺では、林の中の小道を散策した後、広場で昼食。昼食時には戸田医科グループのスタッフがボランティアとして参加し、スタツプから暖かい豚汁を提供していただいた。

昼食後は、戸田医科グループの朝霞台病院と東所沢病院の施設を見学。両病院の老人性痴呆疾患の治療棟や脳血管障害や大腿部骨折後などの回復期リハビリテーション病棟の最新施設や治療風景などを見学した。

なお、この日は、沼崎貞良道南会副会長の誕生日。中村グループ会長からバースデイケーキが贈られ、この日の参加者全員(二三人)で沼崎副会長を祝福した。



## 道南会創立

### 四十五周年記念誌

道南会は、昭和三六年の発足以来、本年(平成十八年)で、創立四十五周年を迎えます。会では、これを記念して、主に創立四十一周年からの五年間の歩みをまとめた記念誌(B5判・八十頁程度)の発行を予定しております。

記念誌では、「函館と私」や「我が青春と故郷」などをテーマに、会員の方々にふるさと・函館に対する熱い思いを語っていただく随想のほか、会員の自己紹介(会員プロフィール)、この五年間の道南会の親睦行事や会合記録などを掲載する予定です。

記念誌の発行に際しましては、会員の皆様には原稿の投稿や広告などについてご協力賜りますようお願いいたします。

会報「道南」十八年新年号・通巻43号

発行 平成十七年十二月十五日

発行所 北海道道南会事務局

横浜市鶴見区生麦四一九一

十三八〇三 川守田 氣付

印刷所 (株)ソーラン社

中央区日本橋小伝馬町六十八